

人間中心主義を超える土

太陽や水、空気のエネルギーによって草木は生育し、土壌の中では、あらゆる生き物たちが互いに働きあつて肥沃な土を育もうとしている。人間もまた、その恵みを存分に受け、大自然のメカニズムの中で生かされている。

しかし、近現代の考え方は、自然と人間とを分離し、人間が住みやすい環境づくり、人間にとって安全な暮らし、人間中心の価値観を追求することが良しとされ、思い通りにならないものは「苦」として排除される。

本当にそれは豊かと言えるのだろうか。むしろ、人間中心の考え方が、生命力を低下させ、一つの価値観でしか考えられないという「苦」を背負うようになってしまったのではないだろうか。

高度経済成長の真つただ中の昭和三十年代より、化学肥料、農薬を使わない自然栽培を続けてきた須賀一家では、人間中心ではない、大自然の仕組みに沿った農業が営まれている。九代目として農家を継ぐ須賀利治氏は、次のように語る。「土はいのちの源なんです」

その大自然に向けるまなざしにこそ、現代の「苦」から解放され、大自然の中で生きるものとして本当の豊かさを知るヒントが隠されている。



「生まれて来る子どもにも
滋味豊かな野菜を食べさせたい」

私の家は九代続く古い農家です。祖父の代までは、野菜や米を作るのはもちろん、畜産、養蚕で生計を立てていました。父・一男が十五歳のときに原因不明の病を思い、そのことを機に父は自然農法というものに出会いました。

体がけたるく、ご飯を食べると吐き気がする。医者からいろいろな薬をもらっても効果は表れず、体は衰弱していきましました。七十キロあった体重は四十キロ台まで減り、視力も衰え、気分までも落ち込み、夜も熟睡できない日々が続きます。しまいには医者からも見放され、もう自分はこのまま死んでしまうのだと考えるほどだったと言います。

死が迫ってくる恐怖を感じながらも、父は心のよりどころを探そうと、薬をも掴む思いで聖書や哲学書などの本を読み漁りました。その中で出会ったのが、「体の中にある曇りが原因している」という自然農法家・岡田茂吉氏の言葉でした。

その考えの中には、食物が健康に与える影響の大きさが記されており、「医食同源（病気を治す薬と食べ物は本来根源

を同じくするものである）」「身土不二（人間の体は住んでいる風土や環境と密接に関係している）」に基づいた自然農法にひとつの希望を見出しました。

本格的に自然農法を始めたのは、昭和三十二年。当時は高度経済成長の真つただ中で、たくさん売るために、きれいで大きく形の揃った野菜を作ろうと、多くの化学肥料、農薬、除草剤が撒かれていた時代でした。現在はその毒性の強さから製造中止となった、有機リン系やドリオン系と呼ばれる農薬も当たり前のように使われていたと言います。父は岡田茂吉氏の自然農法を実現するために、化学肥料や農薬を使わない栽培はできないだろ

うかと考えたそうです。

昭和三十二年というのは、父が結婚をして私が生まれた年でもありました。農家出身の母・サカ江もその考えには賛成で、「生まれて来る子どもにも滋味豊かな野菜を食べさせたい」と二人は意気投合し、試しに農地の一部を使って始めました。

しかし、自然農法の考え方は分かっているても、その具体的な指南書が当時はまだなかったために、何から始めたらいいのか、どのような方法で作物を育てたらいいのか、手探り状態です。それまで行っていた化学肥料と農薬を使った慣行栽培を止め、化学物質を一切使わない方法に切り替えると、農地は

農薬中毒による、禁断症状。に陥り、収量は一気に減ってしまいました。

時代の流れに逆らうように自然農法を始めた両親に、周りからは冷たい視線が向けられます。

「あんなさまでとはとても百姓じゃ食っていけない」
「いま時、肥料なしで作物を育てるなんて飯を食わせないで子どもを

